

松尾大社

「松尾さん」と呼ばれる松尾大社は、古くから酒造りや味噌造りに携わる人々が商売繁盛を祈願し、境内にある神聖な井戸から水を汲むために参拝をしてきた神社です。松尾大社は、京都が日本の都になる 794 年より前の 701 年に、豪族の秦氏によって創建されたとされています。主祭神は山の神である大山咋神と水運の女神である市杵島姫命です。南にある摂社には月の神である月読尊が祀られています。松尾大社は、亀の像や春に咲く鮮やかな黄色の山吹、芸術的な 3 か所の庭園、そして酒造りや酒にまつわるお守りで有名です。

本殿

神社の本殿は、特徴的な「松尾造」の建築様式で建てられており、一般的な前側の屋根が長く、後ろ側の屋根が短い、非対称の「流造」とは対照的に、建物の前後が同じ長さで反りのついた切妻屋根が特徴です。何世紀にもわたる年月の中で、京都にある多くの古い建造物は火災によって失われてきましたが、応永（1394 年～1428 年）に建てられ、1542 年に大規模な修復が行われた松尾大社の本殿はその運命を免れ、市内でも最古の建造物のひとつとなりました。建物は国の重要文化財に指定されています。

神の遣いである亀

伝説によれば、この神社の主祭神である大山咋神は、かつて近くの川を亀と鯉とを交互に乗り替えながら旅していたそうです。現在、この 2 匹の動物は神の遣いとされ、境内全域では特に亀の像が際立っています。神殿の両側には小さな亀と鯉の像があり、入口付近にある手水舎と神聖な滝の近くにある亀の井の隣にも亀の像が置かれています。最も人気があるのは「なでかめさん」と呼ばれる岩の上の小さな黒い亀の像で、撫でると幸運が訪れると信じられています。

重森三玲による 3 か所の庭園

松尾大社には、有名な作庭家である重森三玲（1896 年～1975 年）が設計した名園が 3 か所あります。これらの庭は 1975 年に完成しましたが、伝統的な美学と現代的な要素を組み合わせた庭を多く手がけた重森氏の遺作となりました。「曲水の庭」には、起伏をつけて石が敷き詰められた庭を蛇行して流れる小川や、飾りの岩と巧みに配置されたサツキの茂みがあります。ここは、貴族たちが雅な宴を催した平安時代（794 年～1185 年）の庭園を彷彿とさせます。さらに小道に沿って進むと、尖った巨岩が連なる原始の山頂に天から降臨する神々を連想させる「上古の庭」があります。神社の楼門のすぐ外には、鎌倉（1185 年～1333 年）様式の池泉式庭園として中国の不老の楽園を表す「蓬莱の庭」があり、大きな石で海に浮かぶ島々が表現されています。庭園 3 か所を訪れるためのチケットでは、神像館も拝観できます。

神像館

「曲水の庭」と「上古の庭」の間にある小さな宝物館には、21 体の神像が安置されています。最も注目に値するのは、神社の主神である大山咋神、市杵島姫命、月読命を表現したとされる 3 体の大きな木製の神像です。彫像が崇拜の対象である仏教とは対照的に、神道の神々が彫像として物理的に表現されることは非常に稀です。平安時代（794 年～1185 年）に彫られた松尾大社の三神は、最も古く、最も保存状態の良い神像です。